

第12課「愛と律法」

* 神の律法は、私たちの罪を気づかせ（罪を明らかにする）、悔い改めに導く役割を持っている。それ故に律法もまた福音（良き知らせ）と言うことはできないだろうか。「あなたは罪人だから、どうかしなくてはならないよ」という「良い知らせ」（言いつばなしだと「悪い知らせ」となるかもしれないが、その後のキリストの必要とか、神の愛による救いという恵みが提供される事を思うと、やはり「良い知らせ」なのだと思う。律法は神の愛によって私たちに与えられたものであると理解する時、正しい律法の理解と、正しい福音の理解が必要になるのではないだろうか。

1. 愛によって働く信仰

- **信仰をふまえた行い**：善き行いとは信仰の表現である。まず信仰ありきで、行いは自然とそれに伴うものである（ヤコブ2：14～26）。パウロは、イエス・キリストにある信仰とユダヤ教の言う行い（律法主義）の違いについて述べながらも、正しい行いと信仰の密接な関係を説いている。ヤコブはユダヤ教の信仰とキリストにある者の行い（信仰に伴う行い）が矛盾してはいない事を述べ、信仰と行ないの関係について説いている。更にパウロは、「信仰」は、神に従うという「行ない」の代わりにはならず、真に神に従うためには信仰は欠くことのできないものである事を示している。確かに、信仰によって義と認められた私たちは、まだ義人ではない（義を望み求めているが）。あくまでも義となれる事（罪悪に対する勝利）が保証されているのであって、現実には、罪の世界に生き、その心には未だ罪とその影響とを持ちつつ、闘っているのである。
- **献身**：旧約聖書にある犠牲（動物が神に献げられる）は、傷の無い（欠陥の無い）ものでなければならなかった。これは義人でなければ受け入れたくても受け入れられない神の真実が示されている（神は罪人を受け入れたくてたまらない）。それと同時に、罪のない者（救い主）が、身代わりになることによって、罪人が義と認められ受け入れられる事が意味されていた。私たちは罪という傷だらけの状態で今を生きている。それによって人生は苦しみや悲しみ、悩みに苛まれる。傷だらけの私たち（神に受け入れられない）を、キリストは包み込んで下さり（愛される者として）、傷の無い（罪の無い）者として、認められ受け入れられる様にしてくださった（ローマ12：1）。私たちは、その愛に触れた時、受け入れられたいという願いと、受け入れるにふさわしい者になりたいという望みが、生き方（行い）を通して現されてゆくのではないだろうか。
- **善い行いは愛の表現**：「あなたを愛しています」という気持ちは、言葉だけでは通じにくい。愛の行為が伴って、相手に届けられる（愛がその心に触れる）。神は私たちがお互いの関係（愛によって結ばれる）によって生きる様にされている。それは、それぞれが身体の部分であって、それぞれに違いはあるが一つの身体を形成しているような関係である事を示している（ローマ12：3～21）。一致した善い関係を築くためには、まず「謙遜」であることが求められる（ローマ12：3, 10, 16、マタイ11：29）。そして、それぞれに与えられた賜物を生かしあい、他の為に用いる事（ローマ12：5～8）を期待されている。その根底には常に「愛」が存在し、愛に基づき行ない、生きてゆく。

2. 律法を守るとは

- **権威に対する態度**：律法とは、ある意味、権威的なものである。権威とは、もともと神に由来し、神によって立てられたものである。権威に対して誤解や反目があるのは、その用い方（権威を与えられた者がどう用いるか）の問題であって、権威そのものに問題があるのではない。本来、権威とは、権威の下にある者を、愛し、養い、守り、生かし、育み、支え、励まし、力を与える為に委ねられているものである（神がその模範）。罪の世にあって、歴史は残虐な支配体制を物語るが、どんな権威であったとしても、キリスト者は善い国民の模範である事を神に期待されている。どんなに辛い状況にあってても善意と忠誠をもって悪と闘うのである（ローマ12：20～21）。権威者の要求が神の要求に反しない限り、忠実に指示し従う。しかし、もしそれが神の要求に矛盾するならば、あくまでも神に従う（ローマ13：1～7、「希望への光」1382p、「患難から栄光へ」上巻68～69p参照）。
- **互いに愛し合うこと**：愛と律法は深い相関関係がある。律法は神の愛を根拠として与えられている。愛が私たちの全ての行いの動機でなければならぬ。律法は神の品性（その本質は愛）の写しであり、愛する事は律法を全うする事となる（ローマ13：8）。最終的に律法は愛を要求する。愛の伴わない律法はあり得ない（神の標準から見ると）。律法は愛に基づいて与えられている。神の十戒は、「神を愛する」事と「人を愛する」という二つの戒めに凝縮される（マタイ22：36～40）。故に、愛する事は律法を守る事に繋がる。
- **再臨に備えること**：時が進むという事は、それだけイエス・キリストの再臨が近づくということである。パウロの時代より現在は確実に救い（再臨）は近づいている（ローマ13：11）。律法を正しく守ってゆこうとイエスの模範に従うことを求め祈る事は、私たちの生活に喜びの変化をもたらす事となる。間違った律法理解は、律法主義を生み出し、異邦人教会に対するパウロの働きをも妨害し、改善をなせねばならない状況を作り出していった。神の愛に目を覚まし、困難が増す終末に備え、律法によって自らを吟味し、イエスの模範に従って信仰によって人生を歩む事を心に留めたい。なた、人生の終わりに再臨に繋がる事を覚え、与えられた時を生かして用いることができる様に、聖霊の導きを求めつつ歩んでゆきたい（ローマ13：11～14）。